

## 「ドイツで生きていく秘訣」について

田村直子

### 1. このテーマを選んだ動機

このテーマについて書こうと思ったのは、なんとドイツ通を自称する私がホームシックにかかってしまったからである。といっても、5,6年前の話しだが…。その時、ホームシックを乗り越えるきっかけとなったのが、オペラとの出会いであった。とことん好きになった。毎週通った。そうこうしているうちにホームシックという病状はなくなった。とことん好きになれるものを見つける。それが外国で長期滞在する際の秘訣だとその時思った。私にとってドイツで生きている秘訣とはオペラである。

### 2. このテーマをめぐるディスカッションの内容報告

パートナーとのインタビューにおいて上記の持論を述べたら思いがけない反応が返ってきた。なぜ好きな「もの」でなければならないのか。好きな「人」、大切な「人」ではないのかと。もちろん大切な人の存在は長期国外滞在を耐え得るものにしてくれるであろうが、人間の存在では「秘訣」つまり戦略یとしてはそぐわない気がするかと答えた。人はいつかは必ず去るものだから。

すると今度は、ではオペラがなければ他の土地では生きていけないのかと問われた。これは否。オペラじゃなくて、他にその土地で好きになれるものがあればよいのだと答えた。それではそれぞれの土地で好きになれるものがない限り「しゃんと」生きていけないのかということになった。自分の「生きどころ」が外的条件に左右されているのか、左右されなければならないのかという疑問である。それには考えこんでしまった。今までは成り行きの、与えられた環境に適應する形で毎回新しいものを趣味として開拓してきていたから。その都度開拓してきたことは、しょせん趣味の領域をでないのか。有効に思っていた好きなもの探しの戦略も長期的な観点からは行き当たりばったりの見えてきたのである。では長期的にも、(ホームシックからの脱出というような)短期的にも効力のある秘訣とは何だろう。それは生きがいを見つけること、ライフワークの確立にあるのではないかということに至った。

上記のようにインタビューで内容の深い話し合いが出来たので、自分として非常に満足し、これでレポートは書けたと思った。「ドイツ、いやドイツに限らず、どこであっても、自分らしく生きていく秘訣は、ライフワークの開拓である。」とグループディスカッションのときに結論を発表したら、なんと「待った」がかかった。それではレポートの体裁と合わない。私の「1」での動機のまとめは「ドイツで生きている秘訣はオペラである」であった。この文の「ドイツで生きている秘訣」という文字面を変えてしまっ

てはいけないというのである(「オペラである」の部分は変更可能なのだそうだが)。ところがその「ドイツ」にこだわっている限り、インタビューを通して得た知見、つまり一定の土地ではなく、どこであろうとも生きがいを持っていれば生きていけるのではない

かということ表現できない。少なくともこの一般化を表現できないのであれば私としてはインタビューの成果を反映したことにはならないし、睡眠時間を削ってまで宿題に取り組んでこのテーマに向き合った甲斐がない…。とそこまで考えてハッとした。そうだ、このワークショップは日本語学習の一つの可能性を体験するためにあるのであって、私のテーマを追及するためにはなかった。このワークショップは自己開発セミナーではないのである。自分のテーマに熱中するあまり、ついつい本題を忘れていたが、ワークショップで提示された書式に則ったレポートの作成、これが第1目標であった。それで、書式に則って結論をだしてみようと思う。

### 3. 結論

わたしにとって「ドイツで生きる秘訣」とは、今回このワークショップを通して「生きがい、ライフワーク」というところまで考えを深める切っ掛けであった。